

and the world is mud.

林智子

Tomoko Hayashi

そして、

世界は泥である

and the world is mud.

2024年

3月30日〔主〕ー6月9日〔日〕

京都芸術センターギャラリー南・北、2階廊下

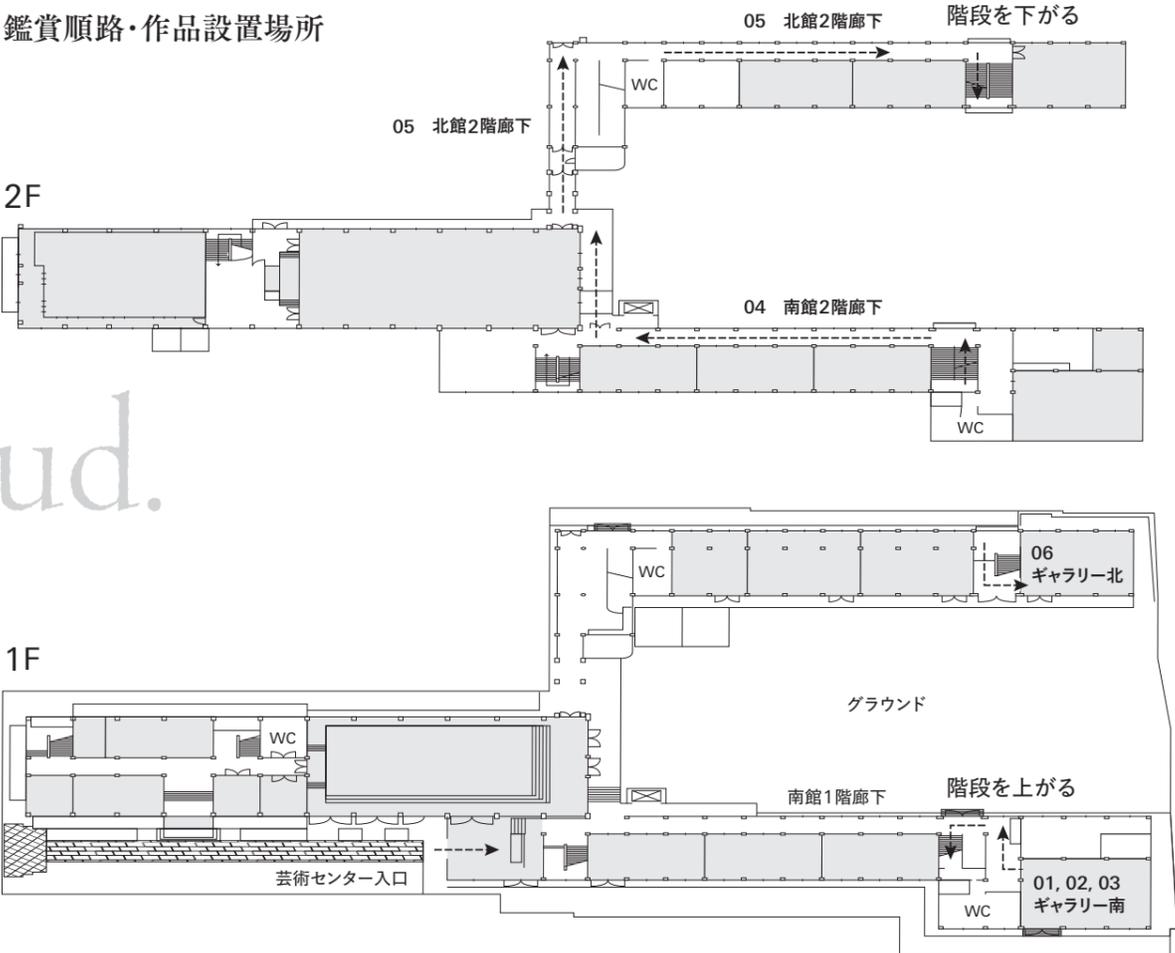
10時ー20時ー5月7日〔火〕休館

※作品にはお手を触れないようお願いいたします

(ギャラリー南内の小部屋の鉱石ラジオを除く)。

※展示上、暗い場所がございます。お気をつけて鑑賞ください。

鑑賞順路・作品設置場所



林智子 | Tomoko Hayashi

1980年生まれ。幼少期を過ごしたアメリカの広大な砂漠地帯や、二十代を過ごした湖沼や山脈の広がるスコットランドやカナダの大自然、そしてそれらとは対象的な混沌とした大都市での生活を経験していく中で、人と人とのつながりや関係性について興味を持ち始め、五感を刺激する様々な方法で「現代人の親密さと交感」をテーマにした作品を模索し始める。その後も様々な国で分野を超えたコラボレーションを行い、現在は京都を拠点に、華厳思想と豊かな自然環境に触発され、「森羅万象の関係性」をテーマに、アートとサイエンスを横断する作品を制作している。

京都精華大学芸術学部卒業、セントラル・セント・マーティンズ・カレッジ・オブ・アート・アンド・デザイン修士課程修了。主な展覧会に「タッチ・ミー」(2005年、ヴィクトリア&アルバート美術館、ロンドン)、「現代美術の皮膚」(2007年、国立国際美術館、大阪)、「スウィート・メモリー」(2011年、京都芸術センター)、「Stance or Distance?」(2015年、熊本市現代美術館)、「タオユアンアート×テクノロジー・フェスティバル」(2018年、タオユアン・アート・センター、台湾)、「虹の再織」(2021年、瑞雲庵)、「Through the Clouds」(2022年、無鄰庵)など。

<https://www.tomokohayashi.com/>

東岳志 | Takeshi Azuma

音響技術者 | Sound Engineer

フィールドレコーディングの手法で音楽の録音に従事。ライブPA、サウンドインсталレーションの音響の設計を行う。2023年 Ambient Kyoto、坂本龍一、高谷史郎作品ほか(音響)、2023年「新たな生」崔在銀、メゾンエルメス(音響、フィールドレコーディング)、2023年地主麻衣子、森美術館(音響、フィールドレコーディング) 2022年 Ambient Kyoto、Brian Eno (音響)など。

<https://takeshiazuma.com>

武田真彦 | Masahiko Takeda

京都を拠点に活動する音楽家、アーティスト。

家業であった西陣織「大樋の黒共」の廃業を背景に、残された素材・技術・歴史を継いでいく見立てを通じて、サウンドインсталレーション、パフォーマンスアーツ、現代美術、伝統工芸など幅広い領域における作品を制作。

フルアルバム「Mitate」(2019年)、サウンドインсталレーション作品「CYCLEE」(2020年)、音のプロダクト「Synclée」(2023年)、旅館「Azumi Setoda」空間サウンドデザイン、「KYO AMAHARE / KYO 居雨」空間サウンドデザインなど。

<http://masahikotakeda.com>

林智子「そして、世界は泥である」

主催:

京都芸術センター(公益財団法人京都市芸術文化協会)

助成:

一般財団法人NISSHA財団

公益財団法人野村財団

特別協力:

株式会社ニソール(N-Energy)

協力:

抱月工業株式会社

松岡廣繁・高谷真樹(京都大学理学研究科地質学鉱物学教室)

深泥池水生生物研究会

安藤英由樹

大阪芸術大学アートサイエンス学科

制作協力:

東岳志(サウンドデザイン・テクニカルディレクター)

武田真彦・糸魚 健一(サウンドデザイン)

山本見久(和鏡)

企画:

安河内宏法(京都芸術センタープログラムディレクター)

宣伝美術:

塩谷啓悟

展示設営:

十河陽平(SOGO TECHNICAL DESIGN)

蟹恒太郎

照明:

小川ユウキ

謝辞

金子直弥

寺尾悠

仁田脇珠惟

井上鼓

北川一恵

貴志白文

朴左愛

森田和子

田中裕美

白岩昌子

福岡直美

段本佐和子

齋藤多恵子

金山美智子

大江正彦

岩下安男

川那辺育美

柴田一夫

八木夕葉

中村太紀

竹門康弘

成田研一

松浦俊樹

Artist Statement

林智子

京都府立総合資料館にて撮影された深泥池

ここ数年、泥に魅せられている。きっかけは、京都盆地の北、上賀茂にある、氷河期の遺存種を残す希少な池、深泥池に通い始めたことにある。深泥池は、貧栄養の水で出来ている為、有機物の分解が進まず、枯死した植物や生き物の遺骸が堆積し、苔類を始め多様な植物が豊かな生態系を育む場となっている。

深泥池の水面に映る木々の様子

池の畔を歩くと、無数の落ち葉が澄んだ水の中でゆっくりと朽ちながら重々に積み重なっている姿を見ることができる。その上には、細かな塵が静かに降り積り、時に魚や鹿などによって攪拌され舞い上がりながらも、また静かに澄んだ水へと戻っていく。晴れの日が続くと、水と陸の狭間の泥の中に、虹色の皮膜が浮かびあがることもある。それは、極微の鉄バクテリアの働きによって生まれるものであり、私の心を魅了し続けてやまない存在である。

深泥池の水面に映る木々の様子

後日、その鉄バクテリアをと一緒に暮らしてみることにした。一週間もするとその皮膜は消えてしまい、また枯れ葉を入れてやると、小さな虫たちがその葉を啄み始め、数時間後にはまたキラキラとした皮膜が輝き出した。その様は、一見静寂

に見える動かぬ泥の中で、見えない多くの小さな生き物たちが絶え間なく蠢いていることをこちらに知らせてくれる。分解、生起、消滅といった日々繰り返される、生と死の循環の世界（フィス）からの呼びかけのようなこの虹の膜は、われわれの意識と無意識の間の膜を私に思い起こさせた。

深泥池の水面に映る木々の様子

心の奥にある深い無意識の世界では、気づかぬとも、同じように絶え間ぬ働きが起きている。普段は意識に上がってこない遠い記憶や、抑えていた感情も、他者との対話やある出来事をきっかけに表面に浮かび上がってきて、私たちの心を揺さぶることもある。それは時に古い傷を抉る行為かもしれない。しかし良悪を分別せず、そこに「確かに在る」ということを認めることは、わたしたちの心の世界の新たな循環を促してくれる一つの力になりうるのではないだろうか。

深泥池の水面に映る木々の様子

本展覧会では、その普段は隠れて見えない働きと相互作用に耳を澄まし、現代社会の中で泥と同じように普段は蔑ろにされやすく、私たちが蓋をして生きている心や意識の世界に注目し、泥の混沌の先にある、生ける自然へと鑑賞者を誘いたい。

1階 <p>ギャラリー南</p>	01:御菩薩池（みそろいけ） bodhisattva pond <p>鉄バクテリアの膜、泥、葉、雨水、地衣類で染めた絹布、鉄、ガラス、写真、N-Energy（水中の植物や微生物の循環作用から発生するエネルギーを利用した発電装置）で演奏された音</p>
	02:我が心ゆたにたゆたに浮尊辺にも沖にも寄りかつましじ <p>土、葉、池の中の映像</p>
	03:Ethereal Voices — 明倫 <p>鉱石ラジオ、ニューメキシコの石、音（インタビュー音声）</p>
南館2階廊下	04:Ethereal Voices — 明倫 <p>土、N-Energy、音（植物発電により演奏された音）</p>
北館2階廊下	05:Lila — 光の粒子たちであり、また波たちであるものの終わりなき戯れ <p>和鏡、音、映像（月と火星の隕石、京都の岩石の薄片）、絹布</p>

1階 <p>ギャラリー北</p>	06:そして、世界は泥である。 and the world is mud. <p>20分のマルチサウンドインスタレーション、和鏡、絹布</p>
------------------	--

泥の中から／泥の中へ

安河内宏法 | 京都芸術センタープログラムディレクター

京都府立総合資料館にて撮影された深泥池

本展を訪れた鑑賞者が最初に目にする一葉の写真。古写真のようにも見えるモノクロの写真に写るのは、深泥池である。洛北にあるこの池こそ、林智子に本展の構想を与えた場所に他ならない。

京都人にはよく知られているように、深泥池は古くから様々な観点から語られてきた。自然史的には、最終氷期の植生が残る貴重な場所として。文化的には、かつて京都に都が置かれていたときの天皇の狩猟の場所、あるいは節分の「豆まき」の起源とも関係する「鬼」の現れる場所として。また卑俗なレベルでは、心霊スポットとして。

しかし、本展を鑑賞するにあたって、さしあたりは、目に見えない背景に向かって想像を広げるよりも、私たちの目の間にあるものを改めてつぶさに眺め、聞き取ることから始めよう。ギャラリー南に佇み、そこに置かれた作品群から、私たちは何を受け取ることができるのか。

実のところ、ギャラリー南に置かれた作品はすべて深泥池に関係する。前述の写真の傍らにある枝と、泥と水と落ち葉が積層するグラス、ギャラリー右手奥の鉄桶にためられた泥水。そして、それらを取り囲むように展示される、林の自宅の裏山で採集した地衣類によって初夏の深泥池で満開になる三葉躑躅（みつばつつじ）色に染められたシルクオーガンジーや、バクテリアの生命活動により発電を行う技術を用いて発せられる音、フィールドレコーディングされた環境音。深泥池のジオラマかのようなこれらの作品は、単に、深泥池を思い出すために置かれているわけではない。そうではなく、これらの作品は、深泥池でいままさに生じているものを示すために設置されている。ということか。

ここで、鉄桶にためられた泥水の表面を眺めてみる。すると、泥と落葉の重なる水の表面に、泥水の暗さとは対照的に、光彩に輝く薄い膜が見えないだろうか。油膜のようにも見えるこの膜は、泥水の中にいる鉄バクテリア（鉄酸化細菌）の活動が作り出したものである。日々生まれては消えていくこの膜は、バクテリアが活動する証左である。鉄桶という人工物の中に救われた極小のこの池の中でさえ、実際の深泥池がそうであるように、生命という運動がある。鉄桶に浮かぶ膜は、そのことを静かに伝え、私たちに目に見えないものへと意識を向けるように促してくる。

こうした鉄バクテリアの膜のようなあり方、すなわち、私たちが感知することのできる微細な現象を通して、その奥に広がる生々流転する世界の広がり进行を想像すること、別の言い方をすれば、目に見えるものや聞き取ることのできるものを通して、それらの背後にある目に見えないものや聞くことのできない存在の気配を感じ取ることこそ、本展の出品作品に通底する特徴である。

例えば、ギャラリー南奥の小部屋に投影された、深泥池の水中の様子を写した映像の傍らに置かれた、鉱石ラジオ。ラジオを慎重に検波すると聞こえてくるのは、林自身が採録した京都芸術センターのボランティアスタッフが思い出を語る声である。鉄バクテリアの膜を通して泥水の中の生命活動を知るように、この作品では、鉱石と鉄棒の接触をきっかけとして、私たちは誰かの声を聴き、その断片的な言葉からは何い知ることのできない個人の内面の広さを感じることになる。

このようなギャラリー南の展示を出た後、展覧会の順路は南館2階から渡り廊下を通して北館の2階へと続いていく。鑑賞者はこの動線上でも、林の準備したオブジェや音を見聞きすることになるのだが、その内容をここで説明することは控えておこう。林の作品に誘われて、私たちの身の回りにありながら、ふだんは意識することのなかった対象を受け取っていただければ幸いである。

さて、こうして展覧会は、ギャラリー北へ至る。鑑賞者は、鏡師の山本晃久氏の手による和鏡が静かに光を照らす瞑想的とも言える空間の中で、巨大な音のかたまりに包まれる。京都芸術センターのボランティアスタッフを中心とした記憶や夢に関するインタビューの音声や深泥池の水中や環境音等により構成される複数の声がかどまし、ひとつのかたまりへと変異していく音が空間を満たしているあいだ、私たちはギャラリー南で泥水の表面に浮かぶ微細な膜に目を凝らしていたときは対照的に、自らが大きなものに取り囲まれているような感覚を覚えることになる。

泥の中から／泥の中へ。深泥池を起点に生まれた本展は、このようにして鑑賞者を泥の中に誘う。目に見えるものと見えないもの。微細なものど巨大なもの。そして、私たちの外にあるものと内にあるもの。これら相対するものの間を往還するかのようにして成立する林の作品に、ゆっくり身を委ねていただきたいと思う。